

原 寛*: 東亜植物註解(9)**

Hiroshi HARA*: Comments on the East Asiatic plants (9)

36) ミヤマニワトコとオオニワトコ 1956年日本のニワトコを *Sambucus racemosa* L. の亜種と考訂した際に、日本国内のニワトコの変異については疑問の点が多かったので変種以下の学名の組合せをしなかった。最近モノグラフ的に英文でまとめ発表する積もりで用意していたが、村田氏(1981)がこの問題にふれ新組合せを作られた。当然同意見のところも多いが、また学名の扱いで異なる点もあり、一部に混乱が生じたのは残念である。取り敢えずここに関係の部分抜き出して解説を加えておくことにした。

ミヤマニワトコは多雪地帯の山中に分化した生態型と考えており、北は奥羽出羽山地から北陸中部地方の山地を経て中国山地を西へ山口県寂地山にまで分布している。これを変種として扱うことには私も同意見であるが、その学名はそう簡単ではない。学名の決定に当っては、基準標本の選定とその同定に注意深い取り扱いが必要である。

村田氏もふれられているように日本海側には小葉が大形になりこれまでオオニワトコと呼んできた型があるが、これらを枝先だけの標本で識別することは至難の業である。その学名の基になった *S. Sieboldiana* Bl. var. *major* Nakai (1926) の基準標本は山形県月山の麓志津附近で1887年大久保三郎氏が採集したものである。この枝先だけの標本を長年眺めミヤマニワトコといわゆるオオニワトコの間ではないかと悩んできたが、標本だけでは解決できないので、遂に結城嘉美氏を煩わすことにした。結城氏はわざわざ1981年6月志津附近へ出かけて観察して下さった結果、同地のもは幹が雪で伏臥し、新条が立ち上り先に花序をつける典型的なミヤマニワトコばかりで、ニワトコ型はないことが明らかになった。それ故ミヤマニワトコ型の学名にオオニワトコ var. *major* (Nakai) を用いることにしていた。しかし、村田氏と同じ組合せが発表されたので内容は異なるがそれをミヤマニワトコの意味に直して用いることにする。

また村田氏はミヤマニワトコの学名に var. *stenophylla* を採用されたが、これは明らかに誤りである。*S. Sieboldiana* var. *stenophylla* Nakai (1921) ホソバニワトコというものは、日光裏見道で中井先生自ら採られた標本を基にしたもので、ニワトコの狭葉で毛の多い一形である。日光地方のニワトコはかなり変異に富み、特に毛の多い形が目立ち、花序にも短硬毛がでてエゾニワトコと区別できない形もある。しかし日光地方では、裏見のような低い所で太平洋型気候の所のもは勿論、奥地でもミヤマニワトコ

* 東京大学 総合研究資料館植物部門。Department of Botany, University Museum, University of Tokyo, Hongo, Tokyo.

** 本誌 55: 321-327 (1980) から続く。

コ型はまだ見出されていない。

そもそも日本のニワトコの学名の基になっている *S. racemosa* L. var. *Sieboldiana* Miq. の基準標本はニワトコの普通形ではなく、小葉の狭いいわばホソバ型であり、一方中井先生のホソバニワトコは小葉の形ではこれと一致するが、若枝、葉柄、小葉に毛が多くこの点ではケニワトコにあたる形に名付けられたのである。ニワトコの単に小葉が狭い形は学名上区別しない方がよいと思う。しかし毛の多い型は日光その他の山地に多くケニワトコとして区別されることも多く、全く無毛のケナシニワトコを品種として扱うのなら、これも品種として扱ってもよいと考える。この際 *S. racemosa* の種名の下では *pubescens* は先行名があって用いられないので命名規約上その学名は *f. stenophylla* (Nakai) Hara となる。もし和名も同様な扱いをするとホソバニワトコの名を毛の多い形に用いることになるが、これはあまりにもまぎらわしい。和名にははっきりした規約がないので、この場合には分り易いケニワトコをとり、その学名を *f. stenophylla* とするのが適当であろう。

なお、これまでオオニワトコと呼んできた日本海側に分布し、ニワトコの小葉が大形になる型には名がなくなるので、オオバニワトコ *f. macrophylla* Hara と名付けておく。ニワトコとの間には中間形も多いので変種とは認められない。以上の学名をまとめて整理すると次のようになる。

***Sambucus racemosa* L. subsp. *Sieboldiana* (Miq.) Hara**

var. **major** [Nakai ex Honda, Nom. Pl. Jap. ed. emend. 241 (1963), nom. nud.] (Nakai) Murata in Acta Phyt. Geobot. 32: 55 (1981), quoad basionym tantum, emend.

S. Sieboldiana var. *major* Nakai in Bot. Mag. Tokyo 40: 473 (1926), e typo.

S. longipes Nakai et *S. microsperma* Nakai, Rep. Veg. Kamikochi 40 (1928), e typo.

S. microsperma var. *longipes* (Nakai) Sugimoto, Key Tr. & Shr. Jap. 372 (1936).

S. racemosa subsp. *Sieboldiana* var. *stenophylla* Murata l. c. 55 (1981), excl. basionym.

Nom. Jap. *Ō-niwatoko* (Nakai 1921), *Miyama-niwatoko* (Nakai 1928).

var. ***Sieboldiana f. stenophylla*** (Nakai) Hara ex Honda, l. c. 241 (1963), nom. nud.

S. Sieboldiana var. *pubescens* Nakai, Tent. Capr. Jap., 10 (1921), e typo.

S. Sieboldiana var. *stenophylla* Nakai, l. c. 11 (1921), e typo.

S. Sieboldiana f. stenophylla (Nakai) Hara, Enum. Sperm. Jap. 2: 52 (1952).

S. racemosa subsp. *Sieboldiana* var. *stenophylla* (Nakai) Murata, l. c. (1981),

quoad basionym tantum.

Nom. Jap. Ke-niwatoko (Nakai 1927).

var. **Sieboldiana f. macrophylla** Hara, f. nov.

S. racemosa subsp. *Sieboldiana* var. *major* Murata, l.c. (1981), excl. basionym.

Folia ramorum floriferorum vulgo 2-jugo-pinnata. Foliola majora 6-15 cm longa 2.5-5.5 cm lata, supra parce minute pilosa, infra glabra. Petioli petioli-que fere glabri. Inflorescentia minutissime papillosa.

Nom. Jap. Ōba-niwatoko (nom. nov.).

Type: Honshu. Aomori: Takata, Aomori (K. Hosoi, Jul. 15, 1951 fl. in TI).

37) 牧野先生のニシキウツギとサンシキウツギ 牧野先生は1931年 *Diervilla nikoensis* Makino ニシキウツギと *D. fujisanensis* Makino サンシキウツギの2新種を御自身の採品に基づいて発表されたが、産地はそれぞれ Nikko, Mt. Fuji-san と簡単に記されただけで詳しい引用はされなかった。また牧野先生がそのように同定された標本は、東京大学、国立科学博物館、都立大学牧野標本館の何れにも見当らない。しかし牧野標本館にはまだ整理中で新聞紙にはさんだままの標本がかなりあり、1981年靱山泰一氏の御協力によりこの類の標本2箱がより出され、これを検討することができた。この中に牧野先生が墨で新聞紙上に「ニシキウツギ」'VII 1928 野州日光'と大きく縦書きされた一包があった。この標本のラベルには日光湯元と記され、*D. nikoensis* の原記載とよく一致する。他の例からみても、これは *D. nikoensis* の syntype と解されるので、この包の中の一枚をその lectotype として指定することにした。日光地域のニシキウツギは変化が少なく安定しており、この標本は *Diervilla decora* Nakai の lectotype である日光裏見道の標本ともよく合致するので、*Diervilla nikoensis* は *Weigela decora* (Nakai) Nakai の異名と考える。

一方牧野先生の採集された富士山麓のウツギ類の標本は、1935と1939年の採品しかなく、1931年の発表以後のものである。しかし箱の中に問題になる3包が見つかった。これらの包はそれぞれ同一型の十数枚の標本からなり、一応「下野日光 1925 T. Makino」のラベルがいれられているが、新聞紙上にはどこにも日光の文字はなく、3包にはそれぞれ「濃紅」「淡」「微紅」という花色のメモが新聞紙に記されていることが分った。これら3型は日光には見られない型で、ニシキウツギより多毛で富士山附近によく見られる型である。一方 *Diervilla fujisanensis* Makino には花色の相違によって *α. typica*, *β. versicolor*, *γ. rosea* の3変種が記載されており、サンシキウツギの名は同一の花が3色に変わるというのではなく、花色の異なる3変種をまとめて同一種とみなし、その総称としてつけられた名であると思われる。牧野先生は同一物をていねいに十数枚標本

を作られるのが常であり、花色の異なる 3 型を注意して採集し 3 包にわけられたものと思う。包にいれられていた日光というラベルは先生の没後仮整理の際に急いで入れられたもので間違いもありうる。靱山氏も 1967 年にこの標本をみてすでにこの点に気付かれ、日光というのは恐らく富士山の誤りであろうと指摘し、*Weigela fujisanensis* Makino 又は *W. sanguinea* Nakai と同定されている。以上のことから私もこれら 3 包の標本は富士山で採集され *Diervilla fujisanensis* Makino の syntype と見るべきもので、各包はその 3 変種に相当するものであると考え、 α . *typica* Makino にあたる濃紅花の包の中から lectotype を選ぶことにした。この型は若枝・葉・子房・花冠に毛が多くヤブウツギに近いが下面側脈上の毛は斜上し、葉柄はやや長い。 β . *versicolor* Makino にあたる標本はニシキウツギに近く、子房、花冠はほぼ無毛であるが葉柄はやや短かい。私はこれらの型をヤブウツギとニシキウツギの雑種と考え、この多型な雑種群を *Weigela* \times *fujisanensis* (Makino) Nakai サンシキウツギと呼ぶことにしたい。

Diervilla sanguinea Nakai ケウツギの lectotype 標本も富士山産で立毛が多く、葉柄は短かく花は濃紫紅色で若枝や子房の毛は少ないがヤブウツギの一形とみなしてよいと思う。倉田博士がケウツギにいれられたものの大部分もヤブウツギそのものと思う。一方中井先生が富士山以西の産でサンシキウツギと同定された標本はニシキウツギのものである。

なおヤブウツギとニシキウツギの雑種は特に富士山周辺に多いが、この両種が接する場所、例えば長野県南端、東海地域、四国など所々に見られる。

In 1931 Makino published *Diervilla nikoensis* and *D. fujisanensis* based on his own collection, but he did not precisely cite any specimens. In packets of unmounted specimens of Caprifoliaceae in the Makino Herbarium (MAK) of Tokyo Metropolitan University, I have found some specimens on which Makino probably described the two species above mentioned, and selected their lectotype specimens as follows:

***Diervilla nikoensis* Makino** in Journ. Jap. Bot. 7: 25 (1931).

Lectotype: Honshu. Tochigi Pref., Nikko, Yumoto (T. Makino, Jul. 1928, fl. in MAK).

Diervilla fujisanensis Makino, l. c. 26 (1931).

Lectotype: Honshu. Shizuoka Pref., Mt. Fuji-san (T. Makino, 1925, fl. in MAK).

Thus typified, *Diervilla nikoensis* is identical with *Weigela decora* (Nakai) Nakai, and *D. fujisanensis* seems to be a hybrid between *Weigela decora* and *W. floribunda* (Sieb. et Zucc.) K. Koch.